

## マタイによる福音書23章「宗教者への悲痛の叫び」

### 1A 群衆と弟子たちへ 1-12

1B 言行不一致 1-4

2B 偽善 5-7

3B 肩書き 8-12

### 2A 律法学者とパリサイ人へ 13-36

1B 天の御国への障壁 13-15

2B 外側だけの律法 16-28

3B 自己義認 29-36

### 3A エルサレムへ 37-39

## 本文

マタイによる福音書 23 章を見ていきます。イエス様は、神殿の境内でユダヤ人宗教指導者との激しい議論を行われました。彼らが次々とイエス様を試す質問をしましたが、彼ら自身を驚愕させる返答をされました。イエス様は、知恵に満ちておられる方であつて 12 歳の頃にエルサレムで学者たちと議論しておられた時と同じだったのです。そしてイエス様から質問されました、メシアはダビデの子であるのに、どうしてダビデは詩篇でこの方を主と呼んでいるのか？ということです。パリサイ派たちは、この質問に答えられず、それから誰も敢えて質問しようとはしませんでした。

### 1A 群衆と弟子たちへ 1-12

そしてイエス様は、群衆と弟子たちに、律法学者とパリサイ人たちのことについて語られるのです。イエス様の心はちょうど、預言者ゼカリヤがキリストについて預言した、宗教者との葛藤を表しているのでしょう。11 章に書かれていますが、自分自身が羊飼いなるキリストを演じていますが、他の牧者はなんと、養うのではなくこれを屠って食べています。それで、彼らのためにこの地に居る人々が、敵の手に渡ってしまうことを教えています。その牧者たちとの激しいやり取りがありますが、その後で、銀貨三十枚を主の宮の陶器師に投げ込んだという出来事があります。

これは、もちろんイスカリオテのユダについての預言ですが、このようにイエス様は、捜し出されて養われるべき羊が、羊飼いであるはずの牧者たち、つまり宗教指導者たちによって食いつぶされて、また誤ったかたちで指導を受けて、間違つた方向に向かっていて、そのためにローマによってイスラエルの家が荒れ果ててしまうことを予告しているのです。これは、私たちキリスト者に重い課題を突き付けています。つまり、キリストに導くべき私たちが、人々がキリストに来ることをかえって妨げてしまっているのではないか？ということです。

## 1B 言行不一致 1-4

1 そのとき、イエスは群衆と弟子たちに語られた。2 「律法学者たちやパリサイ人たちはモーセの座に着いています。3 ですから、彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。しかし、彼らの行いをまねてはいけません。彼らは言うだけで実行しないからです。

イエス様は初めに、群衆と弟子たちに語られます。彼らの教師は、いつも律法学者やパリサイ人たちののですが、彼らについてどうすればよいのかを教えられます。「モーセの座に着いています」と言われていますが、これは町の門のところにある座で、そこに座って争い事の裁定をしていました。コラジンの町の遺跡からその座が発掘されています。けれども、イエス様はここで、単なる争い事の裁定の話をしているのではなく、自分たちこそがモーセの律法を守っている権威を継承していると自負していたことを教えておられます。

それに対してイエス様は、「彼らがあなたがたに言うことはすべて実行し、守りなさい。しかし、彼らの行いをまねてはいけません。」ということなのです。彼らは律法を教えていること、律法を知っていることに自負していたのですが、それを行っているとは限らなかったのです。パウロは指摘しているのですが、律法を持っていても、律法を行っていないという問題を持っていたのです。「ロマ 2:17-23 あなたが自らユダヤ人と称し、律法を頼みとし、神を誇り、みこころを知り、律法から教えられて、大切なことをわきまえているなら、また、律法のうちに具体的に示された知識と真理を持っているので、目の見えない人の案内人、闇の中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自負しているなら、どうして、他人を教えながら、自分自身を教えないのですか。盗むなど説きながら、自分は盗むのですか。姦淫するなど言いながら、自分は姦淫するのですか。偶像を忌み嫌いながら、神殿の物をかすめ取るのですか。律法を誇りとするあなたは、律法に違反することで、神を侮っているのです。」

そしてヤコブは、キリスト者であっても同じ課題があることを指摘して、「ヤコ 1:22 みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけません。」と言っています。クリスチャンではない人は、「教えているのに、そのように本人が行っていない」というのを見事に観察していますし、キリスト者の間でも言っていることと、行っていることが違うことによって、その間にある愛が冷えて行ってしまいます。

4 また彼らは、重くて負いきれない荷を束ねて人々の肩に載せるが、それを動かすのに自分は指一本貸そうともしません。

「重くて負いきれない荷」というのは、イスラエルなど中東に行くと、地元のアラブ人が本人の姿が見えなくなるほど、木の枝を背負って運んでいる姿を見かけますが、まさにそのような状態です。具体的には口伝律法、ミシュナのことです。安息日について、パリサイ人と律法学者が、イエス様

が行われていることを責めたのを思い出してください。それを守ろうとするのであれば、がんじがらめになってしまっただけに負いきれない荷なのですが、自分に対しては抜け穴を用意していたということなのです。

異邦人も割礼を受けるべきかどうか、エルサレムで激しい議論になった時、ペテロが語り出して、異邦人の救いについてこう言いました。「私たちと彼らとの間に何の差別もつけず、彼らの心を信仰によってきよめてくださったのです。そうであるなら、なぜ今あなたがたは、私たちの先祖たちも私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みるのですか？（使徒 15:9-10）」イエス様が、人々に「あなたの信仰があなたを救った」と何度となく言われたことを思い出せますか？それだけ救いとは、単純なものです。律法を守っているユダヤ人でさえ、これは負いきれないということが分かっていました。けれども異邦人も守らなければいけないと強く主張していたのです。しばしば起こることですが、ある掟や規則について、人が強く主張して、他の人々にも絶対にそうしないといけないと圧力をかける人ほど、つまり律法主義に陥っている人ほど、その人自身が守れていないということなのです。

そして自分が何かを語る時、人に語る時は、同時に手を指し伸ばすということが求められていますね。イエス様が、「自分は指一本貸そうともしません」と言われていますが、言葉だけで行いが無いのは、真実な愛ではありません。「Iヨハ 4:17-18 こうして、愛が私たちにあって全うされました。ですから、私たちはさばきの日に確信を持つことができます。この世において、私たちもキリストと同じようであるからです。愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。恐れには罰が伴い、恐れる者は、愛において全きものとなっていないのです。」

## 2B 偽善 5-7

5 彼らがしている行いはすべて人に見せるためです。彼らは聖句を入れる小箱を大きくしたり、衣の房を長くしたりするのです。6 宴会では上座を、会堂では上席を好み、7 広場であいさつされること、人々から先生と呼ばれることが好きです。

イエス様が、ただ見た目の霊的な様子、そういったものに気をつけるように注意しています。既に山上の垂訓で、人に見せるために善行をしていることについて戒めておられました(6:1)。ここでは、「聖句を入れる小箱」とは、テフィリンと呼ばれます。嘆きの壁に訪問すると、ユダヤ教徒の人たちが身に着けているのを見ることができます。額に付け、また左腕に付けます。どこから来ているかと言いますと申命記 6 章 8 節からです、「これをしるしとして自分の手に結び付け、記章として額の上に置きなさい。」とのことなのです。どんなところにおいても、主の命令を思い起こしなさいという文脈の中に書かれていて、門柱にも書き記しなさいとあるので、ユダヤ人の家庭には、メズザーという箱が入口の門柱に付けてあります。

けれども、その箱が不必要なほど大きいのです。中には、四カ所の聖句が書かれた小さな羊皮紙が入っているとのこと。そして、「衣の房」とは、民数記 15 章 38 節の命令で、「衣服の裾の四隅に房を作り、その隅の房に青いひもを付けるように言え。」とあります。これも、ユダヤ教の男性がツイットと呼ばれています。タリットと呼ばれる肩掛けの布の房に付いています。これも見せるために長くしたりするという事です。そして、宴会での上座、会堂での上席を好むということ。また広場ではラビとあいさつされることを好むということ。教会において、宗教臭くなる時、それは見た目が霊的に見える圧力を受けることです。言葉遣いとか、ふるまいとか、何かこうしなければいけないということを行っている人が目に見えない既得権を得ていくのです。

### 3B 肩書き 8-12

そしてもう一つの問題は、「先生」と呼ばれることを好むという、教師としての特権意識です。

8 しかし、あなたがたは先生と呼ばれてはいけません。あなたがたの教師はただ一人で、あなたがたはみな兄弟だからです。9 あなたがたは地上で、だれかを自分たちの父と呼んではいけません。あなたがたの父はただ一人、天におられる父だけです。10 また、師と呼ばれてはいけません。あなたがたの師はただ一人、キリストだけです。

8 節から、イエス様は弟子たちに対して、彼らと対比させて語られています。「しかし、あなたがたは」と言われています。ここで「先生」と訳されているのはラビです。ラビは、自分の弟子たちの職業や結婚についても決定することのできる力を持っていました。さらに、肉の父親よりも大切にされていました。また、師でもあります。ここは「導き手」という意味です。口伝律法では、父が師かの選択の場合、師を選びなさいと教えられていました。これだけの特権が与えられていたのです。

ですから、日本のキリスト教会において牧師を「先生」と呼ぶことについて、特に私たちカルバリーチャペルの間では、気をつけています。互いに牧者らを「～さん」と呼んでいるのはそのためです。しかし、イエス様がここでラビと呼ばれてはいけないとしているその意味の強さと、日本の文化や習慣の中にある「先生」とは大きな開きがあります。ラビは、実に肉親の父以上の権限を持っていたのですが、日本で、学校の先生にしろ、医者にしろ、代議員にしろ、そんな強い権限は持っていません。

けれども、一つの原則は導き出せます。そういった呼び名、肩書きの裏には、「教える者が他の信者よりも神に近い関係にある」というような、意味があります。それで、その者と他の信者たちの中には自に見えない隔たりが出来ていて、先生は神によりささげている特別な人で、他の平信徒はあまりささげていないという印象を持たせます。しかし、そんなことでは絶対にはないのです。イエスは、「あなたがたはみな兄弟だからです。」と言われました。イエス様でさえが、甦られた後にご自身を私たちの兄弟と言ってはばからなかったのです。であれば、どうして上下関係や隔たりを作

ってよいものでしょうか？

11 あなたがたのうちで一番偉い者は皆に仕える者になりなさい。12 だれでも、自分を高くする者は低くされ、自分を低くする者は高くされます。

イエス様が、弟子たちに教えられていたことです。天の御国においては、仕える者が偉大な者とされ、自分を低くする者が高くされます。

## 2A 律法学者とパリサイ人へ 13-36

そして次に、イエス様は律法学者とパリサイ人たちへ、激しい非難を浴びせられます。かつて弟子たちには、「幸いです」と八回、宣言されました。山上の垂訓ですね。ここではその反対の「災いだ」という宣言が、八回あります。ここから、何をもって災いなのか私たちはへりくだって、聞き取って行かないといけませんね。

### 1B 天の御国への障壁 13-15

13 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは人々の前で天の御国を閉ざしている。おまえたち自身も入らず、入ろうとしている人々も入らせない。

「偽善」という言葉を、イエス様は何度もお使いになっています。偽善というのは、演技で仮面をかぶるようなものです。つまり、実際はそうではないのに、人目には霊的に見えるように振る舞うことを意味しています。偽善によって、何が起こるのか？最も忌まわしいことは、自分たちが天の御国に入ることができないだけでなく、入ろうとしている人々を妨げているということです。イエス様が、小さき者を躓かせるのは、碾き臼をゆわえつけられて海の中に投げ込まれた方がましと言われましたね。神が人を救いたいと願われているのに、本気で神の御心に従っていない、けれどもそのように振る舞っているような人々によって、妨げられているという事実に対して、イエス様は憤慨を抱いておられます。九十九匹の羊を後にしても、迷い出た一匹を捜しにいくのが主の心です。

そして次の災いは、14 節ですが、新改訳の下、引照のところに書かれています。「わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはやもめの家を食いつぶし、見栄のために長い祈りをしている。おまえたちは人一倍ひどい罰を受けるのだ。」

モーセの律法には貧しい人に対する施し、具体的にやもめも出てきますが、施しは命令です。けれども、その他の律法の細部の掟を守るのに一生懸命で、そういった憐れみを示すことを怠っていたのでしょうか。良きサマリヤ人の前を通り過ぎる、祭司やレビ人のように、彼らは無慈悲というよりも、目の前の律法の細部の掟を守ることで精いっぱいだったので、そうってしまったのでは？と思われる。神を愛するのではなく、細部の掟一つ一つを達成することが自己目的化して

しまったのです。それで、その一環として長い祈りもします。私たちもその危険性があります。

一つ一つ決められたことをやっているうちに、主がどんな心をもって、憐れみを示して動いておられるのかを忘れてしまうのです。イエス様の心を求めるのではなく、自分自身のしていることを優先させていやしないか？福音の光に照らして、弱っている人、悩んでいる人に敏感になり、そういった人々に届こうとしているか？やらなくてもよいことなのに、イエス様に命じられている事でないのに、それを行っているうちに、福音の光に照らして事欠いている人に届くことを怠っていないか？ということです。

15 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは一人の改宗者を得るのに海と陸を巡り歩く。そして改宗者ができる、その人を自分より倍も悪いゲヘナの子にするのだ。

人を躓かせることの続きですが、三つ目の災いは、改宗者がさらに過激な改宗者になるという現実です。ユダヤ教に改宗させるために熱心に動いて巡り歩くけれども、改宗すると今度は、その人がさらに過激にそれを信じていくということです。自分自身もゲヘナに投げ込まれるけれども、その人はなおさらのことゲヘナに投げ込まれるにふさわしい者になってしまうということです。

これは異端やカルトと呼ばれている人々を見れば、明らかです。けれども実は、正統な教会と呼ばれているところでも起こってしまう現象です。カルトの人であれば、道端で目覚めよ！の雑誌を手に行っている方々は本当に熱心で、純粋です。けれども、それによって天の御国とは正反対の方向に進んでいってしまっているのです。正統と言われる教会であっても、律法主義や、何か偏った熱心さに駆り立ててしまうと、それを行っている人々はさらに熱心に、純粋にそれを行って行こうとてしまいます。そうやって、誤って熱心にさせて迷わせた者たちは、災いを被ります。

## 2B 外側だけの律法 16-28

16 わざわいだ、目の見えない案内人たち。おまえたちは言っている。『だれでも神殿にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、神殿の黄金にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。』17 愚かで目の見えない者たち。黄金と、その黄金を聖なるものにする神殿と、どちらが重要なのか。18 また、おまえたちは言っている。『だれでも祭壇にかけて誓うのであれば、何の義務もない。しかし、祭壇の上のささげ物にかけて誓うのであれば、果たす義務がある。』19 目の見えない者たち。ささげ物と、そのささげ物を聖なるものにする祭壇と、どちらが重要なのか。

15 節までの災いは、人に対する悪影響ですが、16 節からは彼ら自身の内面の問題を扱っておられます。まず、彼らのことを「目の見えない案内人」と言われています。案内をしている人こそが、きちんと知らなければいけないのに、目が見えないので、案内をしている本人も、躓くことは必然です。

第四の災いは、神殿よりも神殿の黄金、そして祭壇よりも祭壇の捧げ物への誓いです。言い換えると、第四の災いは「神ご自身に取り組むのではなく、それに付随するものに取り組む」ことです。神殿ではなくその黄金、祭壇ではなくその供え物です。

まず、誓いというものが何だったかは、山上の垂訓でイエス様に取り扱われていました。自分の行うことを、自分よりも上位の存在によって誓ってそれを行うことを宣言します。偽りの誓いをしてはならないと、主は命じられていますが、イエス様は誓ってはならないと言われました。これは、字義的に誓ってはならないということではなく、誓いそのものが空疎になっているからです。行うことが大事なのであって、そのまま、命じられたことを「はい」「いいえ」で応答しなさいと言われました。

ここでは、神殿は神が住まわれるところだから、この方に誓うのは畏れ多い。したがって、その黄金にかけて誓うのであれば、もっと自分なりに誓ったことを果たせると思ったようです。祭壇も同じで、そこで主に対して、罪を赦していただいたり、自分自身を捧げたり、それから神と交わりをするのですが、それも自分が直接、神に対して行なったのであれば、出来なかった時に大変なことになるから、直接、祭壇に誓うのではなく、その上の捧げ物によって誓うということにしたのです。

20 祭壇にかけて誓う者は、祭壇とその上にあるすべてのものにかけて誓っているのだ。21 また、神殿にかけて誓う者は、神殿とそこに住まわれる方にかけて誓っているのだ。22 天にかけて誓う者は、神の御座とそこに座しておられる方にかけて誓っているのだ。

イエス様が言われているのは、「直接、人は神のところに行けるし、行かないといけない」ということです。神に近づけば、神が近づいてくださいます。神殿は、神のところに行き、礼拝するのであり、祭壇は、そこで直接、神に罪を赦していただきます。そして、神につながれば、自ずと神に関わることについてもそのまま含んで清められます。パリサイ人や律法学者が行っていたのは、そのように直接に、大胆に神と向き合わずに、自分自身で何とかできそうな設定づくりをして、それで得点を獲得していこうとするような姑息な手段なのです。

これが律法主義と福音の違いで、福音は、そのまま今の自分を主のところを持っていくことです。それは戦いです、自分との戦い、葛藤です。悔い改めに導かれるし、自分がとことん嫌になるかもしれませんが、けれども律法主義は、自分が神と共にいられるような自己完結の世界を自分で作り出してしまうのです。自分のやり方で神に近づこうとし、それは違うと指摘されると、怒ります。カインが自分の畑から作物を主に持って行った時に、それを受け入れてもらえないかった時に怒った時のようなものです。

23 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちはミント、イノンド、クミンの十分の一を納めているが、律法の中ではるかに重要なもの、正義とあわれみと誠実をおろそかにしている。

十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならないことだ。24 目の見えない案内人たち。ブヨはこして除くのに、らくだは飲み込んでいる。

第五の災いは、いわゆる「森を見ずして木を見る」ということです。細かいことを気にするために、かえって最も大事なことを忘れてしまっていることです。ある人が、こう言いました。「大事なことは、大事なことを大事にする。」ここでは十一の捧げ物についての掟です。律法の中に、捧げ物の十分の一を捧げることが命じられています(レビ 27:30)。それで、彼らは細かいことに拘り過ぎていました。菜園で取れる、「ミント、イノンド、クミン」について、いちいち十分の一を測って、それを捧げていたようです。けれども、聖書の中心は、正義、憐れみ、誠実ということであり、イザヤもミカも、いろいろな預言者が、そのことを訴えていました。主の言葉をミカは伝えました、「6:8 人よ、何が良いことなのか、【主】があなたに何を求めておられるのかを。それは、ただ公正を行い、誠実を愛し、へりくだって、あなたの神とともに歩むことではないか。」

しばしば、十一献金についてクリスチャンの間で議論があります。これは旧約の律法であり、新約では命じられていないという人が多いです。私は、それは間違っていると思います。「十分の一もおろそかにしてはいけないが、これこそしなければならないことだ。」とイエス様は、はっきりとされています。私たちは、収入が得られたらその与えられた十分の一を分けて、それを献金として主に捧げるというのは、信仰生活の骨格になります。けれども、そこで十分の一というのは、税引き後なのか、それとも元々の給与のことを指すのか？という議論をしたら、おそらくここでパリサイ人と律法学者の主張していることと、同じことをしていることでしょう。そのような計算よりも、正義と憐れみと誠実、つまり、神の御国について、自分の周りの人々の霊的な必要について、そして誠実に主に仕えていくために、御霊に導かれることを祈り求めるとか、そういったことに気を使いなさい、ということです。

25 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは杯や皿の外側はきよめるが、内側は強欲と放縦で満ちている。26 目の見えないパリサイ人。まず、杯の内側をきよめよ。そうすれば外側もきよくなる。

第六の災いは、「外側だけの清め」です。パリサイ人や祭司は、石の器を用いていたそうです。器に何か汚れる物が付いていて、それを洗い落とすことができるのをはつきり見せることができるのは、石の器だからでしょう。そのようにして、外から見えることには神経を使いました。けれども、イエス様は、心がどれだけ清められていないか、汚れているかをご指摘されています。これも、福音と律法主義の違いです。福音は、心がどうなっているかを取り扱います。心の隠れた動機を神が明らかにされます。ですから、自分はそこそこの人間だと思っても、実は強欲と放縦でいっぱいになっていることに気づき、そこで自分は裁かれるべき罪人であることを知るのです。そこで、初めて神がキリストによって、罪の罰を身代わりに受けさせたことを知り、自分の行いではなく、神



の恵みによって、罪が赦され、義と認められます。

律法主義は、外側の清さを求めます。言い換えると、人からどう見られるかが最も大事なことです。自分が付き合っている人々から自分が悪く思われないかが大きな課題で、そのことに囚われるなら、律法主義の過ちに陥ります。

27 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは白く塗った墓のようなものだ。外側は美しく見えても、内側は死人の骨やあらゆる汚れでいっぱいだ。28 同じように、おまえたちも外側は人に正しく見えても、内側は偽善と不法でいっぱいだ。

第七の災いも、「外面の清さ」です。イエス様は、この部分を強調したかったのでしょうか、ユダヤ人にとって、死体に触れることを避けるのは至上命題でした。死体に触れたら汚れるからです。だから、墓には年に一度、白く塗られました。誤って触れないために、であります。そのように気をつけているのに、あなたの心の中は偽善と不法で一杯になっています。

本当に福音に立っていただければと思います。私たちは集まっていますが、主の前に集まっています。そこでは、すべてが透明で、裸です。自分の全ての暗いところも、光の中で明らかにされます。その中で罪赦された喜びがあって、そうして他の兄弟姉妹と付き合います。世の中では、それなりに自分を繕わないといけないでしょう、うまくやっていくために。けれども、教会は違います。キリスト者の集まりは違います。互いに主の前に出て来るところです。

### 3B 自己義認 29-36

最後の災い、第八の災いは「自己義認」です。

29 わざわいだ、偽善の律法学者、パリサイ人。おまえたちは預言者たちの墓を建て、義人たちの記念碑を飾って、30 こう言う。『もし私たちが先祖の時代に生きていたら、彼らの仲間になって預言者たちの血を流すということはなかったらう。』

これまでイエス様の激しい非難を聞いて、「パリサイ派や律法学者はそうとう偽善だな。とんでもない人たちだ、哀れだ。」と他人事のようにしていたら、それこそが最も大きな偽善です！先祖たちの罪を、まるで自分のことではないようにして免罪し、自分をまるで預言者や義人のほうに、あるいはその同情する者として自分を見立てるならば、それこそが自己義認であります。

31 こうして、自分たちが預言者を殺した者たちの子らであることを、自らに対して証言している。

32 おまえたちは自分の先祖の罪の升を満たすがよい。

イエス様は、彼らがそのまま先祖と同じところにおり、自分の時代でさらにその罪の枳を満たしてしまっ、もう一杯になっていることを指摘しておられます。

33 蛇よ、まむしの子孫よ。おまえたちは、ゲヘナの刑罰をどうして逃れることができるだろうか。

バプテスマのヨハネと全く同じことを言われています。まむしの子孫よ、という言葉。そして、ゲヘナの刑罰から免れることはできないこと。ここの宗教と、福音の厳然とした開きがあります。最も宗教的な人が、ゲヘナに投げ込まれるという現実です。神の前に自分が罪ある者であること、これを抜きにして他の周近的なことを行ったとて、人を義とすることはしないのです。

34 だから、見よ、わたしは預言者、知者、律法学者を遣わすが、おまえたちはそのうちのある者を殺し、十字架につけ、またある者を会堂でむち打ち、町から町へと迫害して回る。

これは、これからイエス様が死んで甦り、天に昇られてから、聖霊によって力を受けた使徒たちが、福音を伝えていくことでもあります。そうすると、彼らが迫害して回っていくということです。

35 それは、義人アベルの血から、神殿と祭壇の間でおまえたちが殺した、バラキヤの子ザカリヤの血まで、地上で流される正しい人の血が、すべておまえたちに降りかかるようになるためだ。36 まことに、おまえたちに言う。これらの報いはすべて、この時代の上に降りかかる。

午前礼拝でも説明しましたように、聖書全体で初めから終わりまで、正しい者が同じ仲間、ユダヤ人によって殺されていった流血に塗られていました。ザカリヤは歴代誌第二に出て来る人物ですが、ユダヤ人の聖書では歴代誌が最後の書物です。

そしてイエス様は、「この時代の上に降りかかる」と言われます。「この時代」というのはとても大事な言葉でイエス様がよく使われていました。一世代と考えたらよいでしょう、荒野の旅をしている時もその世代の者たちを荒野で死なせるようにされて、新しい時代の者たちに約束の地を受け継がせました。同じように、その時はおそらく紀元後 30 年ですが、一世代、だいたい 40 年の間に、これまでの悪に対する報いが降りかかるのだということです。それがエルサレムとその神殿が、ローマによって破壊される、紀元後 70 年の出来事です。

主は、キリストにおいてご自分の義を現わすのを待っておられたことが、ローマ 3 章に書かれています。「3:25-26 神はこの方を、信仰によって受けるべき、血による宥めのささげ物として公に示されました。ご自分の義を明らかにされるためです。神は忍耐をもって、これまで犯されてきた罪を見逃してこられたのです。すなわち、ご自分が義であり、イエスを信じる者を義と認める方であることを示すため、今この時に、ご自分の義を明らかにされたのです。」神が、キリストにおいて

ご自分の怒りを満たされるために、これまでの罪を見逃してこられました。けれども、その最終的な罪の赦しの供えを受け入れなければ、残るは神の怒りしかないのだということなのです。

### **3A エルサレムへ 37-39**

37 エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。38 見よ。おまえたちの家は、荒れ果てたまま見捨てられる。39 わたしはおまえたちに言う。今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」

イエス様は、群衆と弟子たち、パリサイ人と律法学者に話された後に、次に「エルサレム」自体に語られます。聖書には、エルサレムやシオンが、まるで生きている、人格のある者のように取り扱われることがあります。ある時は娘、ある時は母親のように語られます。しかし、私たちにもないでしょうか、多くの歴史がしみ込んでいるところに来たら、私たちもそこで声を聞いたり、あるいは自分が語りかけることがあるかもしれません。私は、長崎で殉教した二十六聖人の記念碑を見た時に、そこに血が流されたことを思うと感極まって、語りかけはしないものの、主に祈らざるを得ませんでした。時代を超えてそこがつながっているように感じたのです。

エレミヤも、イエス様と同じように嘆き、悲しみました。それが哀歌として残っています。まるでエルサレムが廃墟となったのを、自分自身の体が病で苦しみ悶えているように描いています。ここにイエス様の腸からの嘆きと言ったらよいでしょうか、「わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。」と言われていました。

しかし、「それなのに、おまえたちはそれを望まなかった。」と言われる。そして、イスラエルの家が裁かれるのですが、それは忍耐が切れて、それで怒り散らすというような安価なものではありません。むしろ、強いられて、最も望まずにやってはいけないのだけれども、それでもそうせざるを得ない神の泣き叫びであります。多くの人が勘違いしていますが、神の愛と神の義、あるいは神の御怒りは反対ではないのです。神は愛であり、いつまでも愛です。神が御怒りを現わす時も、その愛から離れて表すことはおできにならないのです。

その神の苦しみは、どうしようもない情熱となって、長い期間によって彼らを回復せしめることとなります。それが、「今から後、『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』とおまえたちが言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない。」という言葉なのです。この言葉は、群衆がろばの子に乗って来られるイエス様に対して叫んだ言葉であり、そして元々は詩篇 118 篇のメシア詩篇から取られたものです。21-27 節までお読みします。

- 21 私はあなたに感謝します。あなたが私に答え私の救いとなられたからです。
- 22 家を建てる者たちが捨てた石それが要の石となった。
- 23 これは【主】がなさったこと。私たちの目には不思議なことだ。
- 24 これは【主】が設けられた日。この日を楽しみ喜ぼう。
- 25 ああ【主】よどうか救ってください。ああ【主】よどうか栄えさせてください。
- 26 祝福あれ【主】の御名によって来られる方に。私たちは【主】の家からあなたがたを祝福する。
- 27 【主】こそ神。主は私たちに光を与えられた。枝をもって祭りの行列を組め。祭壇の角のところまで。

ここの 26 節の言葉を、言うことができる日が来るのであれば、イエス様を彼らがもう一度見ることになるのです。それまでは、この家が荒れ果てたままになります。ユダヤ人は個人的には異邦人と同じように救われていきますが、宗教指導者が気づき、国民的に霊的に救われるのは、この日を待たないといけません。ゼカリヤ書 12 章に書かれています、「12:10 わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと嘆願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見て、ひとり子を失って嘆くかのように、その者のために嘆き、長子を失って激しく泣くかのように、その者のために激しく泣く。」まだ二千年近く経っていますが、この日は来ていません。しかしその間に、実を結ぶ国民たちの中で神の国は進んでいます。しかし、いつの日か異邦人の完成の時に来て、それからイスラエルがみな救われます。

次の章は、イエス様が、神殿が荒れ果てたままになることを弟子たちに教えられ、そして世の終わりにはどうなるのかについて、お語りになられます。38 節と 39 節の間に何が起こるのかを教えてください。